

# 「ブリコラージュ」による物の意味の展開

乗 本 秀 樹

## Development of Meanings of Things by “Bricolage” Actions

Hideki NORIMOTO

### Abstract

The author previously reported various types of meanings of the things developing in daily consumption life. In this paper, one more type has been found, on the basis of the implications from the actions of kinder garten children. Through the addition of a meaning type, the understanding of human life will be more deepened.

**Key words** : 消費 consumption、意味 meaning、解釈 interpretation、ブリコラージュ bricolage

### 1. はじめに

日々の生活や人生の展開を励まし支援することが、生活研究の目的である。そのためには、生活の構築や改善を促し導こうとする視点、ならびに生活の展開を解釈し見守ろうとする視点という、2つの異なった視点の連携が望まれる。

筆者は、後者の視点から、消費を中心とする生活の場に展開する物の意味を見渡し分類してきた。日々の生活で直観される物の意味、あるいはさまざまな生活調査の報告から推測される物の意味について、多様な蓋然性（「そういうこともあるだろう」）を文献によって見当づけた。それを通して、消費する人間の姿をも見当づけた<sup>1)</sup>。

この方法により、これまでに、10タイプの物の意味を見出した<sup>2)</sup>。

- ア. 設計に組み入れられる物
- イ. 集団への同一化の手段としての物
- ウ. 差異化の手段としての物
- エ. コミュニケーションを補強する物
- オ. 時空間を分節し象徴する物
- カ. 記憶・回想への媒体としての物
- キ. 雰囲気醸成の媒体としての物
- ク. リズム醸成の媒体としての物
- ケ. 仮想現実への媒体としての物
- コ. 重荷としての物

各々の物の意味は、次のような、それぞれに独特の人間像に支えられる<sup>3)</sup>。

- ア. 内発する欲求を目標に高め、合理的に選択する。
- イ. 集団に帰属しようとする。
- ウ. 他人や過去の自分とのちがいを表出し、競争や変身を志向する。

- エ. 人間関係や集団の力働を解釈しつつ生きる。
- オ. 象徴に心身を委ね、独特の時空間を体験し乗り越える。
- カ. 物に触発されて記憶をたぐり寄せ、アイデンティティを保つ。
- キ. 手入れによって雰囲気と気分が醸された空間で、生き生きと生きる。
- ク. 物を扱うなかでリズムを育み、世界に住み込む。
- ケ. 心身の力量を越える物のなかで、独特の感受性や価値観（感）を帯びる。
- コ. 自身の目標や物を明晰に認識できない。環境を秩序立てて認識できない。

本稿の課題は、幼稚園児の遊びの光景などから示唆を受けて、上の意味群と人間像にさらに1タイプずつを追加することにある。

## 2. ありあわせ利用の制作活動

### (1) 幼稚園児と制作活動

多くの幼稚園でそうであるように、三重大学教育学部附属幼稚園では、教師によって入念に整えられた環境のなかで、遊ぶことを通した子どもの発達を目指す。たとえば、ある秋の日には、次のような遊びが予想される<sup>4)</sup>。

- “・水栽培や野菜、花の生長の様子を見たり、水をやったりする。
- ・友達や先生を誘い、警泥やオオカミごっこなどの鬼ごっこをする。
- ・気の合う友達と砂場で水路を作り、水を流したり、裸足になって感触を楽しみながら遊んだりする。
- ・うんていやホッピング、竹馬等に挑戦する。
- ・気の合う友達と役をきめて、お家ごっこ遊びやレストラン等を楽しむ。
- ・空き箱や紙などを使って好きなもの、イメージしたものを作り、作ったもので遊ぶ。
- ・ドングリや落ち葉、小枝等を使ってマラカスやケーキなど好きなものを作ったり、遊びに取り入れたりする。” [以上、4歳児]
- “・自分たちで育てたお米のモミとりをする。
- ・ドングリゴマを自分で作り、回して遊ぶ。
- ・金槌で板に釘を打ち、コリントゲームを作る。
- ・絵やまんが、お手紙をかいたり、廃材や紙類を利用して制作遊びをしたりする。
- ・4～5名の友達同士が声をかけ合って竹馬やホッピング、または縄跳びなどに挑戦する。
- ・大勢の友達と誘い合い、「獅子舞警泥<sup>けいどろ</sup>」をする。
- ・砂遊びや泥団子作りをする。
- ・4～5名の気の合う友達が集まり、サッカーをする。” [以上、5歳児]

遊びのうちには、紙、木、砂、泥、粘土、枝、葉などのありあわせの物を使った制作活動も多い。これについて教師はさまざまに配慮し準備する<sup>5)</sup>。

- “・空き箱や段ボール、紙、新聞紙など身近な材料を使って好きなものを作ったり、作った物で遊んだりする〈幼児の姿〉。
- ・空き箱や段ボールを使ってイメージしたものを作り始めたり、前日までの続きや友達の刺激を受けたりしながら作ることを楽しむ姿が見られる。自分なりに考えたり工夫したりしながら自由につけていけるよう、それまでの様子から制作に取り入れられそうなものを準備しておく〈環境の構成〉。” [以上、4歳児]
- “・自分のイメージしたものを作るために、必要な素材（空き箱や空き容器・紙類などの制作材料）を自分

で調達し、イメージに近づけようと工夫する。また、友達と同じものや一つのを役割分担して作る〈幼児の姿〉。

- その子らしい発想やデザイン、思いをのびのびと発揮できるよう、十分言葉にして認める。また、友達とイメージを重ねて作ったり、思いを出し合って共同作品を作ったりする喜びを感じている幼児たちの思いに共感していく〈教師の援助〉。
- 自ら材料を調達できるよう、見渡しやすい素材の配置〈環境の構成〉。”〔以上、5歳児〕

園児たちは、登園後の1～2時間をさまざまに遊ぶ。そのなかで、保育室に用意されている材料を用いて思い思いに制作する。一園児（4歳）の動きを追跡してみると、次のようである（継起の順）<sup>6)</sup>。

……

- ベランダから保育室に入る（9：30過ぎ）。
- 入り口近くの材料コーナーに注目する。トイレットペーパー芯をつないで工作を始める。手早く剣を作る。
- 剣を背中とシャツの中に差し込む。靴を履いて、小雨の中、傘をさして園庭へ出る。ちらっちらつと肩越しに背中の剣を振り返る。
- 園庭内の舞台に行く。教師と2人の男児と合流。身ぶりから察するに、背中の剣を話題にしている模様。
- 3人と別れる。ゆっくりとのびやかに歩いて、畑近くの小屋へ。
- かたつむりを見つけた模様。保育室に戻ってくる。
- 紙箱を貼り合わせたものを持って室内を歩く。かたつむりを入れる。
- 再び園庭へ。なかまと2人、1つの傘で出る。大型遊具で先の2人と合流、さらに3人と合流する。
- 雨が大きくなったので、教師が建物内に戻るよう指導する。
- また、先ほどの舞台へ行く。
- 雨が本降りになったので教師が出迎える。背中の剣は、半分ずり落ちて、まるでシッポのよう。剣をとりはずす。
- 保育室内で（10：10）。食卓・台所コーナーで、ぐるぐると動き回ったり他の園児や教師と話しながら過ごす。
- 粘土で、ごはんを夢中で作り始める。フォークやスプーンとともに、食器によそったごはんを「どうぞ」と言うようすで、筆者に差し出してくれる。他の園児が去り1人になっても作っている。
- 「おかたづけしましょう」と言う教師の声。
- 先生に促されてかたづけ始める（10：40）。
- ちゃぶ台の下にもぐってたわむれる（他の園児をける）。

……

上には、“剣”と“ごはん”の制作が織り込まれつつ、園生活のひとつが展開している。剣やごはんが作られたきっかけとしては、教師によって材料が環境構成されていたことが大きい。剣を一人で作り始めたことについては、自発性が強そうに見える。しかし、保育室に入る前から作ろうと意気込んでいたのか、それとも材料を見たときに思いついたのかは明らかでない。ごはんを作ろうとしたのは、他の園児たちがままごとをしている中に入り込んだためであり、ここでも自発的な動機よりも環境的な事情が大きいように思われる。また、はじめに剣やごはんのイメージがどのように描かれていたのか、あるいは作る途中でさまざまなヴァリエーションが思い浮かんだのかは、定かでない。

いずれにしても、トイレットペーパー芯や粘土という具体物が用いられ、これらの材料の性質に制約され、それを生かしながら剣やごはんのイメージが実現された。そして、剣を例にとって制作された物

の効果を推し量ると、園庭を周遊する際の心のほうが剣によって支えられているのではないかと思われるほどに、積極的な気分や環境を創り出したようである。

## (2) 日常生活と制作活動

幼稚園児がありあわせの物で何かを作ること、それを取り込みつつ遊びの生活が成り立っていることを述べた。しかし、考えてみれば、私たちの日々の生活も、その多くの部分がありあわせの物を使うことによって成り立っている。

生活の目的や目標を達成するために、物が適切に調達され、測られた量の物が設計されたとおりに投入されてゆく。—「エンジニア」のように合目的な生活管理が理想とされがちであるが、現実にはそういう場合だけではない<sup>7)</sup>。手元にある感性的・具体的な物を生活の中に生かすことに腐心する。そのようにして制作するなかで、あらためて生活の目標や基準が探り当てられたり生活管理のイメージが確かめられることも多い。

ありあわせの物による制作、その要諦としての「具体物による思考」ということであるが、食事準備を例に考えてみよう。

食事準備に際して、私たちは多くの場合に、栄養、熱量、費用や時間のことを真っ先に考える。これらがとくに重視されるのは、学校や病院での給食準備であろう。そこでは、市場に出回る食品や食材やその他資材について種類、単価、単位量あたりの栄養素量や熱量が調べられる。また、メニューが食品や食材やその他資材の量的関係としてとらえられる。そのうえで、1日(1食)に必要なとされる栄養素量の上限・下限、熱量の上限・下限、支出可能な予算額、調理にあてられる時間の上限などの諸基準をトータルに満たす献立、ならびに食品や食材の種類と量が決定される。そして、調達、調理へと準備が進められる。

以上は目的合理的な食事準備法であるが、個人や家庭はそうでない方法をしばしばとる。たとえば、どんな食品や食材がどれほど手元にあるのか、どんな調理器具があるのかを手にとって調べながら、献立を決めてしまう、そして作ってしまうこともある。したがって、出くわす食品や食材に誘われて、並行的ないし事後的に「こんなものが食べたい」という目標が形成されることさえある。栄養素量、熱量、費用ならびに時間などの「概念」はいったん背景に退き、目で見たり手で触れる具体的な「物」に即して準備が進められると言えようか。

生け花は、後者の方法が極度に推し進められた例であろう。そこでは、花、草、木、はさみ、鉢などの道具や材料を見たり触りつつの思考、自身が抱いているイメージの表現、道具や材料との対話、さまざまな着想が展開する。そして、生けられた姿は、求めてきたイメージをあらためて認識させてくれるとともに室内空間に和やかさや張り詰めた気分を生み出してくれる。

あるいは、部屋の模様替えでもよく似たことが展開する。すなわち、私たちは机、椅子、ソファー、棚、パソコン、テレビなどの具体物の一つ一つを見るとともに、室内の全体を見る。そして、さまざまな配置のパターンを考える。そのなかからあるパターンが目立って、自分が模索していたイメージと照合される。こうして、安堵感や適度な緊張感がともなう新しい空間が作られるのである。類似の過程は、庭木の剪定、料理の盛りつけ、衣装の身ごしらえなどにもうかがわれる。

## 3. 「ブリコラージュ」という行為

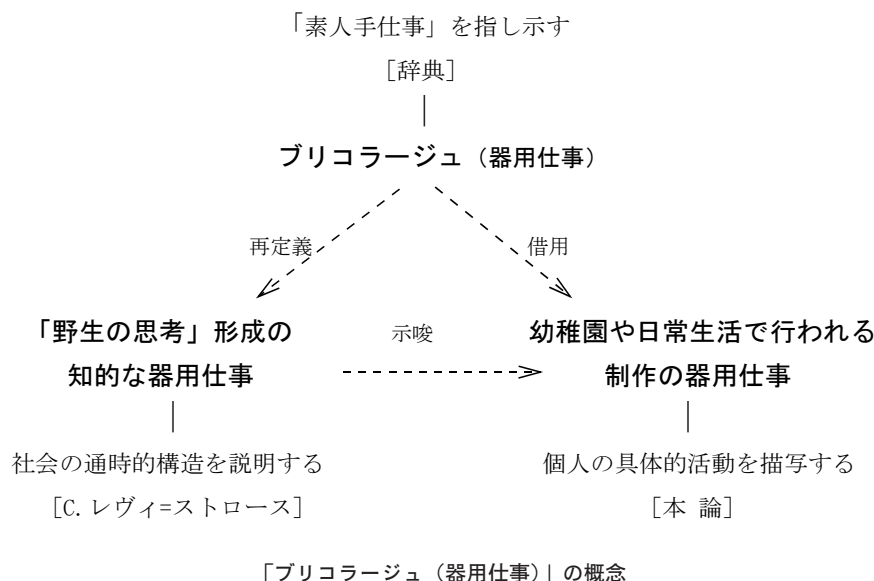
「ブリコラージュ」という言葉がある。手もとの仏和辞書によると、「素人手仕事」という意味である<sup>8)</sup>。この言葉に注目したのが、C.レヴィ＝ストロースである。ここでは、下図のような関係において、「ブリコラージュ」に関心を向けてみよう。

よく知られているように、レヴィ＝ストロースは、いわゆる「未開」の社会にも、「混沌」から脱して「合理的秩序への一段階」が見られること、ならびに『『第一』科学と名づけたい…知識』が展開することを指摘した<sup>9)</sup>。彼は、「未開」社会の「観察と思索の諸様式」（野生の思考）を、近代科学の思考と対置する<sup>10)</sup>。そして、前者について、「器用人」による「工作」を類推する<sup>11)</sup>。「野生の思考」を支える厳密さと体系性と具体性を、器用人のなせるわざであるブリコラージュによるものだと言うのである。

すなわち、「ブリコールール bricoleur（器用人）」とは、「ありあわせの道具材料を用いて自分の手でものを作る人」であり、彼が行う仕事が『『ブリコラージュ』 bricolage（器用仕事）と呼ばれる仕事』である<sup>12)</sup>。器用人は、「いままでに集めてもっている道具と材料の全体をふりかえってみて、何があるかをすべて調べ上げ、もしくは調べなおす<sup>13)</sup>。そして、「道具材料と一種の対話を交わし、いま与えられている問題に対してこれらの資材が出しうる可能な解答をすべて並べ出してみる。しかるのちその中から採用すべきものを選ぶ<sup>14)</sup>。また、器用人は、「エンジニアとはちがって、仕事の一つ一つについてその計画に即して考案され購入された材料や器具がなければ手が下せぬというようなことはなく、「限度のある材料を用いて自分の考えを表現」しつつ、「多種多様の仕事をやることができる<sup>15)</sup>」[以上、図中の「再定義」]。

2. では日常生活に展開する食事準備、生け花、部屋の模様替え、庭の剪定、料理の盛り合わせ、衣装の身ごしらえについて、私たちの経験を思い起こした。そこには、概念ではなく具体物による思考、道具・材料との対話、部分と全体の往復、イメージの表出、あるいは「可能な解答（着想のヴァリエーション）」（括弧内は引用者）の「並べ出し」という要素が含まれている<sup>16, 17)</sup>。また、同じく 2. では、教師における配慮事項などをも参考にして、幼稚園児の制作行為においてイメージの表出という要素が展開することをみた。これらから、私たちの日常生活や園児の活動には、レヴィ＝ストロースの言うブリコラージュの特質がうかがわれる。さらに言うと、レヴィ＝ストロースは、神話世界の混沌をめぐって、知的なブリコラージュによって「感覚界の思弁的な組織化と活用」が図られると言う<sup>18)</sup>。これにならって、工作的なブリコラージュによって園児の行為や日常の生活行為を支える志向や基調が整えられる、すなわち“感覚界の感覚的ないし美的な組織化と活用”が果たされると言えるのではないか<sup>19)</sup> [以上、図中の「示唆」]。

もちろん、歴史を越えて一貫する社会構造の特質を見出す際に援用される「ブリコラージュ」や「器



用人」は、本稿の関心と直接の関連はない。それどころか、社会構造の不変を強調する際に用いられる言葉を成長しつつある子どもの行為を特徴づけるために用いるのは、必ずしも適切ではない。また、レヴィ＝ストロースにおいて、具体的な人格として「器用人」が特定されているわけでもない。それにもかかわらず筆者がこれらの言葉に関心を寄せるのは、園児の生活や日常生活に上述の諸要素が備わっていることにくわえて、レヴィ＝ストロースにおいて具体物を用いる制作行為が知的な行為として認められているからである。そして、具体物による思考と概念による思考が両輪のように並び立つ、とされるからである<sup>20)</sup> [以上、図中の「示唆」]。

#### 4. ブリコラージュに組み入れられる物

以上のことをふまえて、「ブリコラージュに組み入れられる物」を、物の意味の一覧表の中に、(B)として新たに位置づけよう(次頁の表を参照)。その意味は、「まだなにかの役にたつ」持ち合わせというほどにひかえめである<sup>21)</sup>。そこには、物を作り、「物と『語』」り物を使って「作者の性格と人生を語る」人間がいる。そして、はじめさまざまな物が相互のかかわりが不確かなまに散乱しており活動を支える志向や基調が不明瞭な生活場であるが、やがて物が編成され制作されることを通して志向や基調が明瞭になる<sup>22)</sup>。

同表では、(A)(設計に組み入れられる物)と(B)がセットになっている。ともに、さまざまな物の固有の用途が生かされ日々の生活で実用に供される資源だからである。しかし、両者のあいだには、人間タイプで言えば「エンジニア」と「器用人」というちがいが、思考タイプで言えば概念中心と具体物中心というちがいが<sup>23)</sup>ある。

なお、具体物の操作である(B)は、同じく具体物の操作である(F)(時空間を分節し象徴する物)や(H)(雰囲気醸成の媒体)と次の点で異なる。すなわち、正月したくとして置かれる門松は(F)であるし、行事の室内に置かれる生け花も(F)である。これらの例からうかがわれるように、(F)であることの特徴は特定の空間・時間に配置されることにある。また、表中に(H)の例として挙げられている「自分で傷みを直すこと」や「掃除すること」の特徴は、手入れによって現状維持(メンテナンス)されることにある。これらに対して、(B)であることの特徴は創造される過程に求められる。

#### 5. むすびにかえて

こうして、11番目の物の意味と人間像がわり出された。以上のような目録作成作業は、完成することなくいわば永遠に続けられる。

私たちが生き暮らす場には、物の意味が無数に刻々に生起する。それらは、いつも明晰に言葉で言い表されるとはかぎらない。むしろ、「相当たってからでなくては知覚者自身にも『ああそうだったのか』と自覚されない」ような場合が多いであろう<sup>24)</sup>。まして、観察者や第三者の解釈によって把握される意味は、いつも暫定的である。その意味で、一覧表の中に、あたかも決まったことあるいは普遍のことであるかのように例を固定するのは、必ずしも適切ではない<sup>25)</sup>。大切なのは、生活展開を見守ろうという視点のもとで、物の意味と人間の像を敏感に感じたり解釈しようとする姿勢、得られた意味をめぐって見守ろうとする人々どうしがディスカッションを深める姿勢、ならびに独断や決めつけに陥らないようにする姿勢である<sup>26)</sup>。

このように、物の意味や人間や生活場の様相を探る作業は煩雑で機微にふれる。そうではあるが、表中のタイプが増すことは、1ないし少数の物観や人間観だけで生活や人生を律しきろうとしがちな私たちが、より多面から人間や生活をとらえるよう反省するきっかけになるであろう。

「ブリーコロージュ」による物の意味の展開

消費に供される物の意味

| 資源としての物         |                                                                          | 記号としての物                                                      |                                                                  |                                                                             | 身体としての物                                                      |                                                                   |                                                                            | 疎外を映す物                                                     |                                                                     |                     |
|-----------------|--------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|---------------------|
| (A) 設計に組み入れられる物 | (B) ブリーコロージュに組み入れられる物                                                    | 言葉としての物                                                      |                                                                  | (F) 時空間を分節し象徴する物                                                            | (G) 記憶・回想への媒体                                                | (H) 雰囲気醸成の媒体                                                      | (I) リズム醸成の媒体                                                               | (J) 仮想現実への媒体                                               | (K) 重荷としての物                                                         |                     |
| 同一化の手段          |                                                                          | 差異化の手段                                                       |                                                                  | コミュニケーションを補強する物                                                             |                                                              | 雰囲気醸成の媒体                                                          |                                                                            | 仮想現実への媒体                                                   |                                                                     |                     |
| 例               | <p>○「速く楽に遠くへ移動できる」自動車。</p> <p>○「温かくて身動さしやす」衣服。</p> <p>○「甘くて元気が出る」菓子。</p> | <p>○サラリーマンの背広・ネクタイ。</p> <p>○冠婚葬祭の衣服。</p> <p>○家族みんな食べる夕食。</p> | <p>○背広や礼服のデザインや取り合わせが各人で異なる。</p> <p>○ネクタイのデザインや夕食メニューが毎日変わる。</p> | <p>○居間-客間-玄関-勝手口のメリハリ。</p> <p>○正月におせち、クリスマスにケーキ。</p> <p>○受験時にお守りをしはさせる。</p> | <p>○懐メロを聞く、何もかもよみがえる。</p> <p>○特別養護老人ホームの持ち込み規制と入居者の認知症状。</p> | <p>○汚れてなくとも、部屋や踏地や教室を毎日掃除する。</p> <p>○自分で傷みを直した服を着ると、ほんのりハッピー。</p> | <p>○キーボード配列を覚えなくても、入力できてしまう。</p> <p>○熟達したかんなんな使い、包丁さばき、パットスイングにうっとりする。</p> | <p>○自動車を運転するときの高揚感、規則・道徳への鈍感。</p> <p>○コンピュータシステムへの没頭感。</p> | <p>○気が滅入ったり疲れていると、洗濯物の山がうっとうしい。</p> <p>○罹災時、何にどう手をつけたらよいかわからない。</p> | <p>人間にのしかかってくる。</p> |
| 物の意味            | 「まだ何かの役につつ持ち合わせ」。                                                        | 集団（同世代、同校、地域、職場、学友、家族）の一員である証をたてる手段、象徴。                      | ちがいが、(他人との自分とのちがいを) 表出する手段。                                      | 空間や時間をきわだたせ象徴する記号。                                                          | 記憶を呼び起こすきっかけ。それによりアイデンティティが保たれる。                             | 手入れによって雰囲気・気分を醸し出す媒体。                                             | 心身と融け合い独特のリズムを形成する。                                                        | 仮想時空間に誘うきっかけ・装置。                                           | 人間にのしかかってくる。                                                        |                     |
| 人間の様相           | 「自分の手でものを作る」。「物と語り、物を使って語り」。                                             | 欲求さえも自身の内から生まれず、集団から与えられる。                                   | 制約された枠内ではあるが、個性を表出する。                                            | 象徴に心身を委ねて、独特の時間・空間を満喫したり乗り越える。                                              | 記憶さえ自在でなく、物に触発されてようやくたぐり起こされる。                               | 雰囲気が保たれ気分づけられた空間でのみ、生き生きと活動できる。                                   | 小道具を使う訓練で体得したリズムを通して、世界に任み込み共鳴しあう。                                         | 日常とは異なった生活感覚(自信・美感・快感・正義感)で別世界を生きる。                        | 物の属性や自身の目標を明確に認識できない。                                               |                     |
| 場の様相            | はじめ、物が散乱。物の再編成=創造により、活動を支える志向や基調が明確になる。                                  | それぞれの集団はワンパターンスキームをもつ。象徴としての物が交代することもある。                     | 物の保有を通して競争が展開される。                                                | 意味と密度において多様な時間と空間。                                                          | 回想によって展開される主観的世界。これに支えられて現実の社会を生かされる。                        | 雰囲気と気分が庇護され安息できる、幾重もの空間(衣、住、地域、自然・風土)。                            | リズムの共鳴体としての生活世界。                                                           | 仮想ではあるが感覚として感じとれる世界。                                       | 混沌とした生活世界や社会。                                                       |                     |

1) 乗本秀樹『システムと姿勢のライフ論』(同文館、1999年、144-145頁)に加筆した。

2) それぞれの意味について、参考文献等を示しておこう。

- (A) 家庭科教科書など。
- (B) C.レヴィエーストローヌ(大橋保夫訳)『野生の思考』、みすず書房、1984年。引用部は、同書 pp.22-27による。
- (C) (D) G.マクラッケン(小池和子訳)『文化と消費とシンボル』(勁草書房、1990年)、J.ボードリヤール(今村仁司・塚原史訳)『消費社会の神話と構造』(紀伊國屋書店、1982年)。
- (E) 外山知徳「家族空間-登校拒否・家庭内暴力と住空間の関係-」(金田利子・外山知徳ほか編『ゆれうごく家族』、ミネルヴァ書房、1985年)。
- (F) M.エリアーデ(風間敏夫訳)『聖と俗』、法政大学出版局、1969年。
- (G) M.ブルノス(淀野隆三・井上究一郎訳)『失われた時を求めて』、新潮社、1974年。一番ヶ瀬康子氏のお話(日本生活学会中部支部例会；1989年5月)。
- (H) O.F.ボルノウ(大塚恵一ほか訳)『人間と空間』、せりか書房、1978年。
- (I) 市川浩『精神としての身体』、講談社、1992年。山崎正和『演技する精神』、中央公論社、1988年。
- (J) 館内端『クルマ運転秘術』、勁草書房、1992年。西垣通『聖なるパトロール・リアリティ』、岩波書店、1995年。
- (K) J.P.サルトル(白井浩司訳)『嘔吐』、人文書院、1994年。

3) 上表は、随時補充される。たとえば、「疎外を映す物」として、「所有される物」(S.d.ボーヴォワール(朝吹三吉訳)『老い(上・下)』、同文書院、1996年)なども予想されよう。

[注]

- 1) 「物（の豊かさ）から心（の豊かさ）へ」とかんたんには言いきれない。本研究は、家政や消費生活を学ぶ学生がこのことについて考えるための文献を準備する作業である。
- 2) 乗本秀樹『システムと姿勢のライフ論』（同文館、1999年）を参照のこと。
- 3) 同上。
- 4) 三重大学教育学部附属幼稚園「平成23年度保育を語る会要項」、2011年11月12日、9・11頁。
- 5) 同上、9・11頁。
- 6) 筆者が、数メートルないし数十メートルの距離を隔てて観察した（2011年6月20日）。（そのため、表情やつぶやきや会話を十分にとらえることができなかった。）
- 7) クロード・レヴィ＝ストロース（大橋保夫訳）『野生の思考』、みすず書房、1984年、23頁。
- 8) “bricolage”は、「1. 転々と職業を変えること 2. 素人手仕事、手なぐさみ、素人修繕」を指し示す話語である（『コンサイス仏和辞典 第4版』、三省堂、1984年）。
- 9) 前掲、クロード・レヴィ＝ストロース『野生の思考』、13、20、22頁。
- 10) 同上、21頁。
- 11) 同上、23頁。
- 12) 同上、22頁。
- 13) 同上、24頁。
- 14) 同上、24頁。
- 15) 同上、22、23頁。
- 16) 同上、24頁。
- 17) ブリコラージュの例としてあげた諸活動は、多かれ少なかれ「美術」的である。レヴィ＝ストロースによると、美術は「科学」と「ブリコラージュ」の両面をもつ。そして、美術は、「手づくり」という徴表にくわえて、「寸法について…属性について…縮減」されている、すなわち実物より「小さい」という徴表をもつ（前掲、クロード・レヴィ＝ストロース『野生の思考』、29-31頁）。また、部分からではなく全体から先に見られることも美術の徴表だと言う。そうした意味で、子どもが作る剣などは、しばしば美術の性質をもつ。逆に、「小さいこと」に欠ける部屋の模様替えや庭の剪定などは美術となりにくい（ただし、「宇宙という現実をこの庭は映している」といったように、より大きな実際を置くことによって、庭の剪定も「美術」となりうる）。  
なお、部屋の模様替えなどをも含む掃除を生き生きとした主体的行為としてとらえる可能性については、李斯琴高娃・乗本秀樹「日本家庭科教育学会誌にみるごみ・掃除観」（『三重大学教育学部研究紀要（社会科学）』第63巻、2012年）を参照のこと。
- 18) 前掲、クロード・レヴィ＝ストロース『野生の思考』、21頁。
- 19) たとえば、“剣”は、わずかではあれ美術性があり、子どもの園庭での活動意欲を高める。生け花は、かなりの程度に美術性があり、和やかな雰囲気や凛とした空気を創ることによって生活行為の質を高めるであろう。（「美術」性については注17）を参照。）
- 20) J.ピアジェも幼児期（2歳から7歳まで）に思考を見出す。上述の“剣”や“ごはん”は、「シンボルのあそび」による「自己中心的」な思考のあらわれである（J.ピアジェ（滝沢武久訳）『思考の心理学』、みすず書房、1978年、32-42頁）。さらに、ピアジェは幼児期のうちに別の思考（「直観」）が優勢になると言う（同上、42-44頁）。こうして2つの思考の併存が認められるのであり、レヴィ＝ストロースにおける2つの思考の併存を彷彿させる。  
なお、幼稚園期を含む「前操作期」（2歳から7歳まで）の子どもが思考・表現することについては、第45回全附連校園長会研究会（2012年8月24日、大分市）における柴山謙二氏の報告（「感じる 考える 作り合う子ども～思考力の芽生えを培う～」）をも参考にした。
- 21) 前掲、クロード・レヴィ＝ストロース『野生の思考』、23頁。
- 22) 同上、27頁。
- 23) 2.-(2) で例示したように、(A)の意味のもとで一食や一日の食事を完璧にデザインするためには、線形計画



法が有効である。この方法により、所要栄養量と熱量の水準を最小のコストで提供してくれる食材の種類と量、所要金額等をわり出すことができる。しかし、私たちがしばしば用いるのは、ありあわせの食材や関心のある食材を適宜に取りあわせて献立をたてる方法であり、第一次的には (B) のもとでの方法である。そこでは、(A) の観点が捨てられたのではなく、心のどこかに保たれている。その意味で、(A) と (B) は補完的である。

24) 佐々木正人『知性はどこに生まれるかーダーウィンとアフォーダンスー』、講談社、1996年、120頁。

25) 表における物の意味の把握方法はさまざまである。意味が行為者に覚知されており行為者自身による言明が可能な場合 ((A)、(B)、(F) など)、行為者に覚知されにくいので観察者による解釈をも要する場合 ((C)、(D)、(E) など)、ならびに行為者には覚知されず観察者による解釈によって明らかになる場合 ((I)、(J)、(K) など) がある。ただし、意味タイプと把握方法の対応は必ずしも一義的ではない。

26) 三重大学教育学部附属幼稚園の教師は、園児たちの物ー人間ー場を瞬時に洞察し子どもへのはたらきかけ（見守ることも含め）を創発する力量の形成に余念がない。また、独断や決めつけに陥らないよう、状況を反芻し吟味し共有するためのディスカッションに力を注ぐ。

**【追記】** 本稿は、日本家政学会中部支部第57回大会（2012年9月8日、岐阜大学）での報告を整理したものである。なお、筆者は、2年間にわたって三重大学教育学部附属幼稚園で親しく幼児の生活にふれる機会を得た。浅田美知子先生をはじめとする教職員の皆様のご厚意にお礼を申し上げます。